

1 発足の経緯

早稲田大学国語教育学会の研究部会として、平成元年に、当会（「国語教育史と実践に学ぶ会」）と「古典教育研究会」のふたつが置かれることになり、現在に至るまで活動を続けています。これらが設置された背景としては、学会設立当初、年間に七～八回ほどの割合で例会が開催され活発な研究活動がなされていたものが、昭和五十五年頃を境に例会が四回ほどに減少した経緯がありました。こうした状況に何とはなしに物足りなさを感じていた若い会員が主体となって自主的な勉強会を結成し、学会活動を支える研究部会として組織されることになりました。以来、このふたつの研究会は学会の中心的な存在として、その活性化に大きな役割を果たしてきています。

2 年間テーマの設定

「国語教育史と実践に学ぶ会」は早稲田大学国語教育学会の理念であるところの、理論と実践を両軸としながらそのいずれにも偏することなく新しい国語教育を創造していくこと、を基本的に受け継いで、「国語教育史」および「実践報告」の両側面に学ぶことを旨としています。現場の実践は理論に裏打ちされなくてはならないが、一方で理論に先走ることも戒めなくてはならない、とは学会設立の中心的存在であった川副国基が大切にしていた考え方です。こうした理念が、いささか長めの会の名称「理論と実践の両側面を明記したそれに反映されています。

発足してから今年（二〇〇一年）で十二年が経ち、重ねた会合も八十八回にのぼりますが、毎回の研究発表は所定の年間テーマのもとに設定されてきました。その毎年異なる年間テーマの一端を紹介すると、

国語教育の現在・教室の「読み」を問う・安定教材を問いなおす・中学の教材 高校の教材 読みの位相を検証する・「言葉」の単元学習・新教材の発掘・目的・理論・方法・実践・国語の先生の仕事・文学教育の復権・新指導要領の検討などとなっています。なかでも「安定教材を問いなおす」は二年間にわたって継続し、中島敦「山月記」、安岡章太郎「サーカスの馬」、梶井基次郎「檸檬」、近・現代短歌、井伏鱒二「黒い雨」、宮沢賢治「永訣の朝」、夏目漱石「こころ」、芥川龍之介「羅生門」、森鷗外「舞姫」、魯迅「故郷」、太宰治「走れメロス」などのいわゆる代表的な教材がどのように扱われているのか、その問題点を洗い出したうえで、教材価値を改めて吟味する地道な作業を続けました。個々の教材にたいして賛否両論が戦わされるなかで浮かび上がってきたのは、教科書制度がもつ利点と限界であり、また文字言語優先で、読解中心に、なかでも文学作品の精読を中心に進められてきた国語教育のありかたでした。

3 読書会

そうした個々の教材論と平行して、毎回行われているのが読書会です。折々に話題となった国語教育論を、ある年は年間で一冊を通読するかたちで、あるいはときに西尾・時枝論争などのテーマに焦点を絞るかたちで進められました。これまでに扱った著書としては、宇佐美寛『国語科授業批判』、増淵恒吉『国語教育論集』、田近洵一編『戦後国語教育問題史』、大村はま『授業を創る』、『言葉という絆』、大平浩哉編『国語教育史に学ぶ』などが挙げられます。

読書会は、毎回レポーターを決めておき、レポーターがそれぞれの課題図書（論文）に関わる問題点を提起したあとで参加者全員の討論となります。毎回、ここで議論が収まらずに予定時間を超過して、実践報告担当者の時間を圧迫するのが常です。しかし、教育史研究と実践研究とのバランスを保つことがこの会の原点であり、今後もまた読書会と実践報告との二本立てで会合を続けていく方針は変わりません。

以上が会の概要です。会への参加は、早稲田大学国語教育学会に所属する方であれば自由です。どうぞ参加ください。今後の予定を記しておきます。次年度（平成13年度）の予定については、後日お知らせします。

第89回 2001年3月10日土曜 3:30～6:00 16号館402-2教室 報告者 高野光男

事務局 横堀利明 yoko.bori@docomo.ne.jp 〒177-0042 練馬区下石神井 1-14-16 03-5372-1496